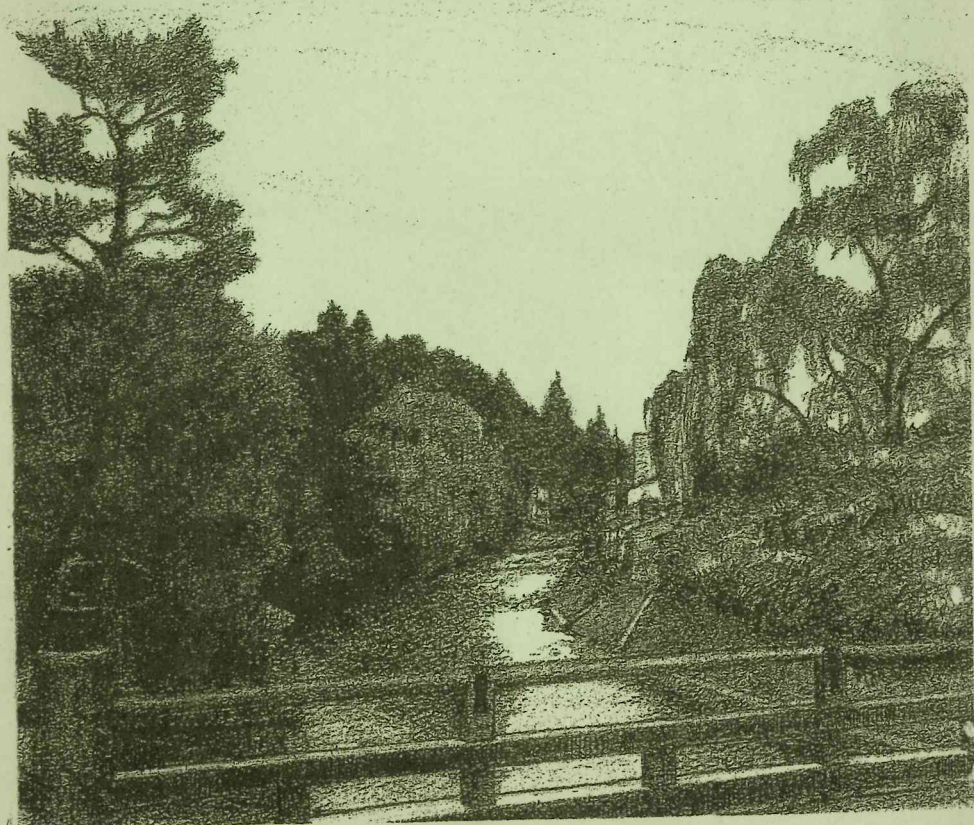


詩集

流 域

和 仁 市 太 郎



詩集

流

域

和仁市太郎



和仁市太郎之像  
万寿

詩集 流域 和仁市太郎



忘れ得べきや	.....	二七
耳聾しいて	.....	二八
憂愁	.....	二九
羊頭狗肉	.....	三〇
勝負	.....	三〇
齒朶	.....	三一
縫る	.....	三二
紫式部	.....	三三
野晒し	.....	三四
檀(まゆみ)	.....	三四
証(あかし)	.....	三五
耳聾	.....	三六
醜草	.....	三七
距離	.....	三八
花咲く樹	.....	三九
洋燈	.....	四〇
時間(二)	.....	四一

距離(二)	.....	四一
片道キップ	.....	四二
六郎にて(轆轤)	.....	四三
冬二に	.....	四四
忿怒の記録	.....	四五
凄潭	.....	四六
ある夢現つ	.....	四七
ある訣れ	.....	五〇
栃の花の咲くころ	.....	五二
少年時代(二六)	.....	五四
少年時代(二九)	.....	五六
高山詩抄	.....	五八
少年時代(二三)	.....	六〇
所懐	.....	六二
射水還り	.....	六三
秋意	.....	六五
木瓜酒	.....	六七

足入れ	六八
母が語った言葉	七〇
生命と言葉と	七二
愛情記	七四
虚しい	七五
ある箴言	七六
あとがき	七八

表紙絵 沖野清氏  
 似顔絵 故・前田万岳氏

無題

あなたが生きる  
 わたくしは死なない  
 十年の時の距たりは  
 わたしが生きている限り  
 永劫に同一線上に並べない  
 あなたが八十歳にならない、と  
 八十歳の苦渋がわかってもらえない。

ことば

語らねばならない言葉を  
 忘れていたわけでは決してない  
 意識を支える明確な言葉でなく  
 言わねば誤解をとくことが――

男らしく信念をもつてあなたに  
直言せねば意味がなく無駄であつても  
発言しとことん聞いてもらつてことが  
多分不可能な仕儀とわかるが  
言葉にだつて意地と言うものがある。

6. 8. 7

### 言葉

コトバが逃げる体内からいや精神から  
還つてこない心から

今日あなたに語つた言葉

私が受けとつた諸々のことば

言葉は神であり愛であつた

不埒なはずかすの放言が

声の届かない次元の違う世界へ――

永劫に再会のかい孤独の世界へ――

会話の許されない幽暗の世界へ離れていった言葉たち。

### 万年青 (おもと)

義兄が贈つてくれた万年青の幾株かが

土地の性に合わないのか年ごとに絶えてゆき

一株だけが紫陽花の古い株根の蔭に

余命を支えていると思つていたが――

肥料も碌に与えず、園芸のたしなみも弁えず

無責任な老いた園生の主であつた

昨日の夕暮れは裏畑の上で雪虫が柱になり  
「雪おこし」も地鳴りし予告をしていた  
今朝は、四、五寸積つた雪を凌いで  
短い茎に紅い粒々の実が穂状に副つて  
簪のように気品あふれ、誇らしゆう問いかけていた。

出 発

青春という常識で考えられない狂気が  
ひとりの人生に幾たびも訪ずれない  
待っているものが破滅であるうとも  
雄々しく不屈な雄図が限られた生に  
ぼつぼつと湧きあがるものではない  
挫折した生活の旗が時に打ちのめされ  
覇気を失い失意に沈んだとき――

雪の舞う幾曲り、神原峠をトラックに揺られ  
僅かの世帯道具に身をゆだねて  
ふる里をたった初心の祈りを確かめる。

ふる里にて

久しぶりに訪れた山かいの道で  
逝く秋の索漠した驟雨が肩をたたく  
守 洞春の彫った版画の土蔵の白壁が  
高原川に投影し風景は昔のままなのだが  
回想の多くは湿った爽雑物を含んでいる  
心はずでに老いを語ることのない  
不帰の旅にたつて語るに由ない  
昔に歩いた石英岩の砂利みちを  
人を恋うてさまよっていた。

初 冬

庭の枯れた草紅葉の上に  
燦銀に深く輝き霜がおりていた  
佇っている脚に寒さが這い上がってくる

いちいの朱い実が五つ六つ  
透きとおった簪のようにたれて――  
私はしばらく初冬の声を聞いていた

と――

一人の少年が蚤音をしのばせ  
葉の落ちた楓の下にくるとブリキ製の空気銃を構え  
隣家の松の茂みで囀っている  
群雀をじつと狙っていた。

## 門出

鬱蒼とした参道の杉の樹の下には  
かたい雪が路上にまだ残っており  
落葉が幾何学的模様に織りこんでいる  
千年余も経たという天然記念物の大杉には

注連が張られ樹勢ゆたかに亭々と聳え  
鎮座する祠から録音らしい奏樂が流れている

車が参道をゆっくり登ってくる  
まはゆい粧いに綿帽子を被った花嫁が  
肅かに手ごられ進んでくる  
国敗れ敬う神々も神威が、おちたが  
人間の心は弱く神意に祝福を享けようとする。

## 寒梅

梅の枝に小粒の花芽がぎっしり  
零下十二、四度の寒さにじつと堪えている  
もつすく春がやってくる  
くじけず苞でつつんでおくれ



きつとハルはやってくる

不遇をかこつ世の児童たち  
縮こまらず、生きておくれ――

### 泥 沼

底知れぬ深いどろ沼に

足をすべらしもがくほどに

足搔きが深まるばかり

悟り拓いた禅宗の名僧智識でも

信仰篤い教えを説かれる牧師さまでも――

私の心の底のそこに棲んでいる

無常不信の不安なる寂しさの

極限……に、説得してはくれない。

――或る日の心の断章――

5・6・12

ある時 ―― 或る某に――

たとえ対者に「死」のごとき致命傷に迫いやる

劇しい悪意を抱いた 必殺の武器ばかりでなく

憎悪に充ちた心がまえて対されたとする

口唇から撒きちらされる感情の抗った言葉――

基本的な人格まで愚弄され生きてきた

棘のある蔑視された言葉の片々であつても

紅い血液はどくどくと迸りでて

この世から安易に葬られることがあるのだ――

あ 「某」は仮面を被った自分であつた。

### 生 命

日ごと息づき育ぐみ伸びる  
いのちに向つた時の心のふくらみ  
春の雨絹糸のごとく柔かく降りそそぎ

聴て止みたる庭の若い樹の  
うす緑りに張り詰めたる枝の頂天に  
いのちの精を籠めた柿の萌芽  
そこに宿れる神がみの恩籠  
そこに秘められた愛の表徴  
この刹那私はたしかに  
生きていることを信ずる。

### クロツカス

きのうの淡い雪が消え陽炎がたちのぼる

体内に生きるのぞみが単純に甦ってくる  
湿つた温かい太陽に土を割つて貌をだした  
クロツカスの群れが言い合わせて  
自分だちの出る幕をささやく

白い茎のうえに濃い紫や黄色や白の花を粧わせ  
晴れがましくあたりを眺めあい  
ながい氷雪のもとで我慢し生きつづけた  
再会し得た春の悦びの挨拶を交わしていた。

### 独 白

これだけの人間であったと思う  
生き方が徹していない  
生ま半熟でどつちつかず  
一片の信念、確たる思想もたない

いい加減の生きざまであった  
寂寥とした深い淵に佇つと  
過ぎ去つた「時」を戻すこと  
年老いた自分を若返えさせること  
万能の智者にも不可能だった

— 7・4・23 —

## 書 信

まず机の上を拭き

あなたからの手紙を改めて読み直し  
書信の内容を反芻している  
本当のことを自分に問えば  
披けた用箋に想いが迸つて  
直ぐにもペンがひとりでに走り  
思いのたけを躊躇なく書けるのだが——

六十年の変わらぬ友情がちょうど  
獲ものを前に猫族が舌なめずりして  
余韻を楽しんでいるようにして  
幾たびも繰り返しあなたの心映えを偲んでいる。

## 蒲 公 英

島との堺いの草土堤にいま盛りと  
たんぽぽが大袈裟にいえほ  
黄色い絨毯を敷いている  
早く咲いた花は絮毛の円い輪となり  
飛び翔つ日を待っている  
戦前は余りに見かけなかった

帰化植物で繁殖力がもの凄く  
街なかの空地や水気もない  
コンクリートの割れ目にまで

葉脈の肥えた緑の葉をひろげ  
幼い時の幻想を壊してしまおう。

熱い夜

熱帯夜の夜が一月余りもつづいた  
八十年ほど生きてこんな暑い昼も夜も  
さいなまれたことが記憶にない  
夜は硝子戸もみんな締め切り  
薄い寝衣にかえると布団に入る  
もつて上った詩集もひもとかず  
枕元の蛍光灯の光でも身体に伝えて消す  
暗くなると不思議と涼を招び睡魔が襲ってくる  
北側の庭の二本の柿の樹が葉影をつくり  
街路灯の淡い先がカーテンに投影し揺らぐ。

— 6・8・23 —

時間

群がる蚊軍に攻められ畑の隅で  
蹲やがみ雑草を抜く—  
他人からみれば退屈なこと  
無駄に過ごす時間と思われるとき  
老人の発想が機を熟し言葉となる  
この世に無為な時間など  
もてあまされる時間などあるはずがない  
見透しのできる「生」の逃げ場も  
ぎりぎりの場に臨んで。

梅落葉

黄黒い梅の落葉を掃きあつめる  
根元に堆肥として還元してやる

素人の剪定でも慣れて巧くできたのか  
たくさんの花を咲かせ実をつけてくれた  
この夏は若い二本の樹から十二キロ余も採取された  
塩に漬かり三日三晩も天気干されて  
苦業のように塩にまみれた生活だった  
日一日と赤い紫蘇に染まり梅漬になつていく

彼地此地に嫁いでいる娘たちは  
もつ心を弾ませ思郷の思いでいよう。

### 墓碑

今の古い墓で満足している

新しい墓など建てる愚かさはやめてくれ  
百年も経ると何もかも摩滅してしまふ  
白い骨たちは大地に還る  
名も成さず巨億の富もつくらず  
辺りの人々にすまなかつた  
世俗の煩わしさから解放され  
あ、ここに一人の阿呆な人間が眠る

### 図書館にて

旧家の大きい土蔵づくりが図書館に改造され  
ときどき借覧に老いた脚で階段を登る  
夏季の図書室は汗がひき身体が引き締まる  
何万冊かの蔵書の多寡もさりながら  
紙背に訴える著者たちの存念が

声にならないで無言に幽閉された  
陽の当らない湿った苦悶と懷疑を語る。

心 耳

或る日は雪のつもった一本の道を  
旅行者のように行きくれて歩いていた  
陽があたると夕暮れちかい凍みのました堅い雪が  
ところどころ真珠に似て綺羅めいた  
移ろいゆく時間が音もなくテープに刻まれ  
秒針の鼓動が波うってつたわり  
心奥にはつきり記録された。

流 域

私はよく知らねばならない  
清冽で孤独に流れつきない奔流の声を

白く皚々の雪原の淵を洗い  
簇生する緑りの菅原の根を洗う  
流れてやまない激情の意思を  
時に粗暴に荒涼と変化する暴虐を。

城 址 で

この国の創成された源初の昔から  
そこに鎮っていた溶岩地帯の丘陵に  
しつとりと水を含んで簇生した苔類が  
薄暮の穹に匂っている  
歴代の杳い祖たちがここから見はるかす  
浮き彫りされた一刀彫りの鋭い刀魂に――

神秘と静寂に太古の息吹をつたえ  
懼れ崇めたであろう諸々の感情が  
脈々とあなたの裔なる肉体を駆け巡り  
飛躍しない思想の嬰児が眠っている。

閑暇の樹こゝろ

この頃は忙しいなどとは恥ずかしくて言えない  
老いた身を案じる周囲のものが気づかってくれ  
新しく機械化された仕事場は私の働く場をせばめ  
ときに孤独におちいり自分をもてあます  
移ろいゆく空疎な時間のなかに啣つこともある  
若い日には思索する刻も惜しんで働き  
生きることは一途に働くことであった  
齟齬と舞いつづける独楽が舞い終わると  
拍手もわからない観客——ザ・エンドである

そんな舞台の情景が肅かに待っていると思つた、に。

蝙蝠

大川にそつた市街地への用水に暗渠があり  
年に一度この用水の井ざらえがある  
あの世へつづくかと思つ真つ黒な側溝を  
尺余の深さの流れにかがんで  
暗渠のなかへ入つて土砂などをさらえる  
不吉なる蝙蝠の群れは夜の目を光らせて  
突然の闖入者に驚き翔び交ひ羽搏く  
今宵は静かなあとの月の十三夜  
月光は端山にのぼり下界を照らす  
夜の帷がおりても翔び群れは街の上を乱舞する  
明るい昼を懼れる部属の政治家もどきに  
夜の王者のように君臨して乱れ翔ぶ。

いま思つこと

いま思つと父はガンでなくなったのだ——  
高山線もなかった大正のころ  
金沢の大病院の外科へ二度もはるばる歩き  
笹津から軽便にのって母が付き添い 手術にいった  
頬っぺに瘤とり爺さんのごぶみたいに  
切ってもらつてもまた瘤ができ  
友達に恥ずかしかつたと記憶している  
私の七歳の秋の暮に  
父は三十六歳の若さで弟妹を何人も残して逝つた。

### 飛行雲

白いワイシャツの肌が少し涼しく  
初夏のはずんだ精神がびゅんと返りかえる  
午前のひととき街をあるいて立ち止まる  
山の街の上をたかくジェット機が一機  
東の山脈より忽然と白銀の飛行雲を描いて  
西のやまのかなたの山頂めがけ狭い街をリボンで結ぶ  
轟音はしばらく静かな山脈の胸盤をこたまし  
家々の戸障子を震わせていたが  
機影はみせず飛行雲は乳いろの白布を  
澄みわたつた空にさらし  
幅ひろく拡がりぼやけて消えた。

### 友情 — 故・松本栄におくる —

水の少ない高台で我々のために焚いてくれた  
平屋づくりの軒下の深い庭に据風呂がおかれ



惜しげもなく湯槽に沈むと溢れ出て  
湿った温ったかいものが直に伝わり  
石になつて深ぶかと沈んでいた  
やはり集まりに出てよかつたと思つた  
開け放たれた広々した部屋で  
久しぶりに貌を合せて話が尽きない  
私は席を中座して庭にでて庭石を渡つてゆくと  
青蛙が一匹茂つた藪草のなかからびよこんと横ざり  
幽邃の境涯が淋しいまでに落ちつかせた。

### 畏 (わな)

渡る人生に「わな」という陥穽があつて楽しい  
この手でこう打てばその先がこうなる  
奇術か上皇術のように巧みに読みとる  
麻薬に痺れた感覚が正常な判断を誤る  
小さな雑魚は法網を潜ることがかなわない

五十年の苦節に生きてきた読みが裏に出る  
培つてきた地盤も巨億の財宝も  
畏は会釈もなく冷酷に葬り去る  
庶民は精一杯の憤懣に双手をあげ  
喝采の拍手を贈る、結構なことではないか。

### 雑草を抜く

雑草を探る、抜きとる  
せまい畔畑の道にへばりついているが  
なんという名の草か知らない  
よくみると精一杯根を張り  
既に小さい花芽をもっている  
幾世代の百姓衆から嫌われ引き抜かれても  
強情に子孫を残し生き続けてきた  
増えてもらいたい長芋、豌豆、人参などは

なかなか稔りをあげてくれない

陽の温もつた大地に蹲んで雑草を抜く  
その一時間ほどの僅かの日課の作業は  
与えられた思索の醗酵する時間でもあるが。

## 人間

私から今日も一人の人が  
素っ気なく去っていった  
いや錯覚で私がある人から 群れから  
逃げ出したのかもしれない  
人との交わりが生甲斐であり  
嬉しさであることは承知している  
生きられるだけこの世に執着し

世を厭うなどとは露おもわないが  
人との間に微妙なる対応するのは  
心を勞することが多うなった。

## 忘れ得べきや

幼い時のふる里の山河は  
年を加えるとなお生々と脳裡に画き  
甦って増殖しつづける  
蟻川は名のように短い川であったが  
今は切替えられて道路になり  
車は我がもの顔に走っている  
朱くちぎれた沢蟹の細い手や脚  
山女やちちかぶ、あぶらめが  
川石を動かすと次の石の下へ逃げ込む  
山が高く深い谷に早く夕光を喚び

一日を遊び戯れた幼い生きものは  
明日もまた子らの訪れを待っていた。

耳聾しいて

私から今日も一人の人が  
去っていった、と思ったのは錯覚で  
私がある人から逃れたのかも知れない  
蔑けすまれた仕事でなく  
自分のせまい暗愚な判断で  
誤解したのだと思いたいが――  
十言われたことを十五にも二十にも  
聴かねば老いたる者が生きてゆけない  
心にかちんと応える微細なサインが  
老いた耳はまたまた誇りにしたい  
耳聾いても屈辱をその底で肌を感じる。

憂愁

いじりの日よりが  
吾がむねうちにも  
あわれ寂寥の  
小鳥すみいて  
奥ふかく胸の  
蕾をついばみており  
そのかなしき  
セピア色のメランコリー  
ことごとくかそかに  
胸をついばみており。

## 羊頭狗肉

すでに炯眼な、発表してきた作品に目を通して下さった  
奇篤な読者が一人でもあったら  
とつくにお気つきであつたらうが  
この標題は「笑止騙誤」とでも題すべきであつた  
羊頭をかかけて狗肉を商うの苦肉の策だつた  
破廉恥な行為をながなが冒してきた  
楽屋の横では拍手もわかない手持ち無沙汰に  
幕を引こうとジレンマに蔭の人は 立たされている

## 勝負

ながい作詩の経験によると  
心のなかに醗酵してくる詩「ころが」  
勝負でないかといつても思ふ  
三分か四分も思想が湧いてくれば作品の半ばが

完成されたと思つていい私の場合――  
結局は人間の生き方に関わり  
身辺を愚痴るだけの駄作ばかり  
人前に恥ずかしくて出せないしろものだが――  
このころ心が老いこむ  
森羅万象が語ってくれなくなつた。

## 齒朶

小手毬の繁つた枝が伸びすぎ  
雪がこいに託つて四、五本剪られると  
その根元にいつここに居つたのか  
岳を伝わりおりてくる白魔にもおびえず  
この時季に珍しく豊かな緑の葉を  
鋸状に伏せた齒朶の一と群れ――  
所を得て敷きのべられた齒朶の座に

お鏡やお神酒 徳利などがすわり  
ご燈明の明かりが神々しく輝く  
舞台はやはり明治に生まれた  
旧い元旦の晨であった。

縫 る

夜半に目ざめるとよく手と掌を組合わせ  
強く握りあつて胸のあたりに組んでいる事がある  
敬虔に悟りを拓いて合掌し  
胸の上に組んだ信仰などの現れでもちろんない  
加齢し独り考えることがせつなく  
力強い誰かの手に縫りたい  
乳呑児が慈母の乳房に触れるだけで  
安んじて深い眠りに入れる母性回帰であろうか  
老いたる者の通らねばならない路  
生きてゐる者の一度は過ぎ行く道

まだ知られない生き先のこと。

紫 式 部

もう暫くのあいだ  
大地に、瘦せた皇の隅に  
ながらえて逝く秋に飾つてやりたかつた  
名のように高貴で艶めいた実むらさきが  
粒つぶの実を枝先いっぱい垂れていたのを  
惜しげもなく心ない人の仕草に伐られてしまった  
冬を近く木の花のすくない季節  
行ずむつかのまま無言に語りかけていたのに……  
来る年は発芽しないと諦めているが  
春がくると執拗に生き継ぐことを証だてる。

野 晒 し

明治に生まれ大正時代に育った自分は  
人生は五十歳で終焉する風潮に押され  
いつとなく自戒し覚悟させるものに培われた  
祖父も親父も本能に走り生殖が終わると  
無責任に二十歳代で次代も考えず世を去り  
児孫の教育などに心を配る余裕はなかった  
一片の書蹟すら残していない無筆な生涯だった  
八十歳の半ばまで生きつづけてき  
齢いのみは祖父たちの倍あまり加齢し  
骨ほねに野ざらしの辱しめを刻んでいる。

檀 (まゆみ)

錦木ともいった、真弓とも書く  
昔の飛騨びとが歌った枕詞の白真弓

樹は堅牢で武士の弓の素材に使われた  
妻が近くの山から幼木を採ってき  
移し植えて四十年を経て秋には  
美事なその名のように錦を飾り  
実生の若木も何本か後を継いだ  
梅雨が終り稀有の熱帯夜の日がつづき  
八月の終りになると日毎、樹勢が衰え  
緑の葉ツ葉が時ならぬ紅葉を催しかけ  
決定的に枯死したことが確認され  
二米ちかい檀を伐らねばならなかった。

証 (あかし)

むかしなんの不審も疑問もいだがず  
これ以外に生きる道がないと独りきめ  
不逞にも懼れげもなく生ける「証」などと

公言して憚らず自惚れてきた  
拙なく千編にちかい詩作品や歌反語は  
六十年の醜い作品の集積であった  
いま羞しく活字になつて散らばつた  
生きた「証」などは蒐めようもなく  
読者の脳裡から消しさる術もない  
自分のおかした足跡を晒した  
とり返しのつかない軌跡であつた。

## 耳 聾

八十五歳で充分生きたとは思っていない  
或はこれ以上生きても追従していけない  
日常茶飯時の会話のうえでも  
印刷機械の諸操作のうえでも  
特別の教養を身につけたものは別として

駆け脚のように文明は追つてき  
あれ、あれというまに追い越していく  
特に追いつきを掛けるように襲つてきた  
耳聾の難聴者にはその感じが深い  
吾が時世がはやい速度でゆき過ぎる  
疎まれて生きる余生に未練はもてない。

## 醜草 (しうくさ)

妻の在所では「秋の取り入れ」を  
ただ「アキ」と呼んでいる  
「もうアキが終わつたかいなア」と  
古語辞典によれば「秋収め」のことである  
蒔いた雑穀の稔つた収穫を刈る時がきた  
だが青春の日に老後を省みず何も時かなかつた

老残の境涯にきて刈り取るものは何もない  
醜草は花も咲かせずはびこるだけ  
腹ふくらませ老後を養う一片のパンもない  
荒涼たる自得の幻野に立っている。

### 距離

待つてくれ、もう少しだ、極く僅かの距離  
先途がみえる、心眼を抜いてぐっと見ると  
自分には茫洋とした冥い道が—  
坦々とした広い道であつたと強いて思つていい  
招んでいるあなたは誰ですか、誰でもいい  
神や仏さまではない、信心もない自分を  
導いてくれる酔狂者などはない  
険阻な不幸せな長い冬の道であつた  
いやはての日は人間に、いや

生きているものへの誰にでも待つている畏かも知れない。

### 花咲く樹

花咲く—もとの樹を想う—たとえは  
その過程にたえず園丁が  
水を恵み 肥料を与え  
太陽に 嵐に 雪に氣遣い  
愛情をそそぐ宮為が隠されている  
観る人はただ花を咲かせた樹木だけを  
美しい 麗しいと眺めるだけだが—  
もしその大地が石塊の混じる荒地だったら—  
自分のぬけ殻を積み重ねた腐葉土の層が  
後からくる者の栄養の糧となり  
指針となつて聚落の樹林を育てることを知れば。



洋燈

戦争に敗れて久しいあいだ  
中華民国との国交が回復しない頃であった  
中国の特産品の展示と即売会が催された  
私の胸をすがすがしいかせが吹き  
通り抜けていく思いであった  
僅かの小遣いの金を握ると  
はやる心をおさえ会場に出かけていった  
昔を訊ぬれば同文同種で  
日本文化を助長された先進国であった  
多くの即売品のなかから一個の  
真鍮製の粗末な洋燈を購った  
様さまの想いをこめて――

時間

一日の時間で言うならば私の過ぎこし方は  
午後の五時を少し廻ったあたり  
時計の短針は素直に指している  
春秋の彼岸のころならば三時ころから徐々と――  
そう思えば薄い膜が生ける物を覆い  
黄昏れる少し前を目に見えない速さで  
地球は自転し夕暮は追ってき終焉を告げる  
生きておる者にも今日死んでいった人にも  
夜はまちがいなく平等に訪れる。

距離 (2)

あなた達が、自分の歳月が八十五歳に

ならないと分らないことがある  
自分は父や母の年齢を遥かに越え生きてきて  
いまその苦業の道程が少し解ってきた  
若く無経験なあなた達に処世の苦渋が  
解らないのは当たり前で年の効には適わない  
二十五年の距離を日数に直せば八六二五日くらい  
考えにしても、行動力にも、思いやり  
この年齢に達しないと、説明も、納得もゆかない  
それが世の真実だ。

### 片道キップ

窓口の向こうで若い駅員が老人の顔を眺めて  
「往復切符にしますか？」と  
父親に対するように親切に訊ねている  
老人は少し感うように考えこみ

過ぎる時間が気になり後続の人の列に  
迷惑が及ぶのを恐れて意を決したらしく  
老人に似つかわしくない音重で  
「そうだな、片道にしてくれよ。」と言った  
老人の胸に師走から一月にかけて  
親しかった幾たりかの先輩が  
片道の路を通って帰ってこない  
旅びとの幻影がふと遮っていった。

### 六郎にて

深く抉られたロクロ谷が高原川へ  
岩石や土砂をまじえた土石流となりなだれ  
スロープが形成され初心者に適当な  
スキー場となり当時は珍しく照明もされた  
このあたり昔は木地屋が多く棲んでいて

木地屋とか六郎（轆轤）という地名があり  
その末裔のなかには「小椋」という  
気ぐらいの高い同級生もいた  
初夏には砂防のため植えられた花アカシヤが  
一斉にさがり藤の白い花穂が垂れその傍を  
馬車が引くトロツコの軌道を危うく歩いた  
この辺りはいま東洋一の三井鉱山の  
亜鉛電解の工場や医院が立ち並んで  
昔を知る人たちはもう少なくなつた。

## 冬二に

この夏、鎖夏の一助のもと、厚い田中冬二の全集三巻を読み終えた  
尤も高山を愛した尊敬する詩人の著作集  
ながいこと書棚に飾りばなしで居たことが悔やまれる  
冬二は良い時代に恵まれ生きた 大正から昭和の初期にかけて

大正ロマンの華やかな時代だからあの詩が書けた  
第二次世界大戦よりあと徐々と  
良い意味の日本は滅んでしまった  
あなたは日本の良俗や花や雪虫、雲、洋灯を  
空気のように白い紙に陳べられた。

## 忿怒の記録

激ヒキのような海がこころの底にたまった  
あれ、これとはつきり確かめられないが  
打撃をうけた心情が月日とともに  
劇しかった忿怒がうすれていった  
あの時とり乱した起伏のある言葉のやりとりが、  
まるで嘘であり平安に還った

書き残した記録が焼け杭に火がつき  
當時を喚び戻し愚かなごだわりに自分が  
未熟だったと坩堝ぶつぽに投ぜられる。

### 凄潭

こんな熟語があつたか、どうか  
わたくしの辞書にはない  
この熟語が素直に今の心中を表現している  
凄く、蒼く、深く、どろどろと渦まき  
這い上がることはむづかしい淵  
昨夜も夢うつつに喚ばれ自覚めた  
テレビジョンをカラーで観るようになり  
脳膜に色彩が刺激的に作動する。

### ある夢現ゆめげんつ

このころ見る夢は昔の記憶のことばかりで  
混線した電話があちこち錯綜しているようだ

夢だな、と思ひながら大方は賤しい

情景に溺れ、結構楽しんでる

藤波橋の袂に庄田という八百屋が魚も売っていた

前を通ると店さきに童児わらわの頭ほどのでっかい

夏みかんが五、六個、勉強中と値が一個十五銭

私の日給が九十八銭で、鉾山の購買部から

購ってくる半搗米が一升二十五銭ほどの

昭和五年の秋の不景気のドン底だった

店のばばさまが「よう働らきに行かしやるな。」と  
愛想いつて、可哀そうねとわらいつている

その横にある松島賊が半分ほせて腹がうす紅く  
少しいたんだのを一折り一緒に包んでくれんさした

「つちがいのこの娘の「お高さんが見えんようじやが。」  
と、訊ねると

「ありや、去年東京嫁にやつたさ。」

（おたかさんと言つても衆議院議長の

おたかさんでない。）

おたかさんはタイピストで長い海老茶袴を

ひきずるようにぞろぞろと

今日も水電の会社で一緒に働いていたんだが――

可笑しいな、あのばばさが少し惚けられたかな

自分のことは棚にあげてやはり理屈にあわない

夢つつのなかだと思いつている

朝浦の急な坂を登りつめると

そこに甘い杏子の大きい樹があつて

石段をおりるとおらんちの家である

かかまが手造りの七輪に湯をいっばいたぎらせ

春蚕の大繭をひいて肌けた肌をかくそうともしない

「わりや、やすいものを仰山かつてきたな。」とどうと

嬉しいのか哀しいのか横をむき欬いていた

庄田の魚屋の家はかかまのその緒をきつた家で

祖父の清十郎が木賃宿をやつていそつたが

山師でかたわら鉾山に手を一攫千金の夢を見られ

みごと失敗し、没落、家を人手に渡してしまわれた

寝所から寒い階段をおりトイレから戻り

うすい布団にもぐりこむと

新派連鎖劇の古いフィルムを逆回転するやうに

さつき見た夢のつづきを多分見ることになる。

ある訣れ

鹽元さきげ豆のとり入れの終った枯れつるぐさを畠の  
まん中に積み上げ、その上に切りきざんで解体した新聞  
二頁大の特製ガリ版の、機械を積みかさね火を放った  
——南無火炎大菩薩さま……。

飛驒匠の齋すまの老いた大工が心魂をうちこんで  
桧材でつくった軽印刷機の枠組みが

柄へもきちんと五十年たつてもくるわず

インキの練り台も刷りものを納める木箱も  
みな苦楽をともししてきた協同の共稼ぎであった  
斬新な印刷機の革命がつぎつぎと

我が小さい仕事場に送りこまれ  
働く場所は老齢とともに見放され

三界にいるところがなくなり十年あまり経ち

仕事場のすみに埃ほこりをかぶり世を託たくっていた

六人のやからが糊口をしのぎ戦さにまけた後の  
食うか、食えない地獄に生き継いでこられた  
糧とちからを与え護つてくれた器物が  
鋸や金槌でむごく解体され非情に

火炙ありにされるとは予想もしなかつたらう

ながくつづいてきた炎熱で乾ききつた産場で  
もえる、燃える！ 枯れ果てて樹液もです根もつきた  
助けを乞う機器たちの声を聴きながら  
古風な感情を駆り立て鬼畜となり

自分の掌で引導をわたしてやりたい、功德である  
今となればそれが苦楽の果ての所業でも  
自分に行える無言の供養である

じつと傍らで身を焼かれるのは自分でないか  
自己を自分で焼き処理する酷熱の散華だ  
心を鬼にし無数の鬼に対している

無限地獄 極楽地獄 悪鬼地獄

極貧菩薩 墨繩菩薩 愛染菩薩

弥勒菩薩……

人間の骨のように白く焼け原型はとどめず  
温くみの残る自分の分身の骨ほねを自分が拾う。

—9・9・9—

### 栃の花の咲く頃

—平湯峠で—

氣息えんえんと乗合自動車は

久手の牧場にかかり—

平湯峠を下るようになると

窓の左右に大きい樹が八ッ手に似た葉を広げ

その先に円錐花序の花が立藤草に似て

白い花を惜しげもなく咲かせていた

妻とはじめてゆく温泉の里への想い出に

花を添えてくれる窓からの送迎は

心に充ちてくるものがあつた

商売がら名産品の包装紙の印刷などで

幾たびか画いた葉っぱや茎の花に親しんでいた

栃の花であることが直ぐ覺つた

自然の山岳のただすまいで身近かく眺められたことに

期待もしていなかっただけに嬉しく

僅かの時間で仕事の煩雑から解放され

流離の旅の感傷に想いをめぐらしていた。

—三三年六月頃の作品—

騒がしいラジオもテレビジョンも発明されていなかった  
大正もすでに終りちかく黄昏れる街の溜り場に  
しずかに人恋しい電気の点ったばかりの  
はだか電球のくらい照明から逃れ  
集散する情報の中に暫く身を委ねるため  
その縁台にさそわれていった――

身内のように交々の悲喜の噂話が撒かれる楽しい一時であった  
あるひとは桔梗に芒の絵など画いた丸い団扇を腰にはさんで人懐っこく  
向いの宮の湯の帰りに安もののシャボンの匂いを漂わせ話題のなかへ入ってくるものは  
はずっぱな亭主を亡くした女房など飛び込んできて

結構夕暮れは団欒の社交場になった

少し子供たちに邪慳な鹿間やの婆の目を慮れ

狭い店頭の一角に並べられた変わりばえない

黒砂糖の飴玉や肉桂玉、甘々棒や一銭饅頭の箱のなかへ目を移す

ちよろちよろと点滴の水輪の水槽のなかで  
半透明な心太のやわらかい肌が浮き沈みし  
やせた素麺の白い糸が群れ揺れている

若い鉦山がえりの鉦夫が二、三人腹をすかして  
吾が家までの短い距離まできていて我慢できず  
胃の臓腑の機嫌をとって店に入る

花街の娼婦<sup>やぶ</sup>たちが白粉と香水を匂わせて

一杯の冷えた素麺を今宵に期待をかけて腹をふくらます  
視覚に訴えるこれらの調った舞台装置は

食べたい盛りの少年の胃液をゴクツと呼びさまし  
糸練りの終わった母の時間を見計らい家に戻ってゆく

裏を流れる滝瀬川の急湍はひとしきり声をたかく滾<sup>な</sup>らせ

山峽の町を夜の帷が包んでゆく。



少年時代 (十九)

夕暮の幕がもうおろされる花街の黄昏れの一とときは物あわれで、夕顔の葩が鉢に三輪ほどあたりをほの明るくして咲いていた。その傍らで二、三人の妓が屯ろして微風を送り迎えて団扇の緑の芒の絵と浴衣の涼しい麻をあしらった絵柄がふしぎと、耳目の底にやきつき廉せうい白粉の香が濁々とただよい、子供の瞳にもきれいな女性せしやうだという感じが脳裡に残っている。

この妓楼の主人は越中から移住した人で立山館といい遊郭の中ほどに数人の妓を抱え生業していた。悲しいことにこの次男坊によくできる同級生がいて、後年彼は師範学校を卒業し順応に出世街道を歩き、最後には校長

にまでになった出世頭の一人であったが脳を患い晩年は哀れであったが—— 小学校だけで進学できず鉾山に働らくようになって、その家の前を通りまた街で出会っても幼ない心が傷つき卑屈な想いが長く巣くった——

母は近在の農家から野菜を買い出し、鉾山の池の上社宅を売り歩いた。この社宅の住人は俊秀なる大学出や技術者が特権階級のように君臨し、町の人びとは雲上の別天地の人たちに思われ羨望視されていた。母は朝はやく起きると竹で編んだ簀やぶを背にしょってふり売りに歩いた。

高価な山葵やまなは料理屋などでしか売れず、学校から帰ると、二、三十本の山葵を風呂しきに包んで遊郭を戸ごと売り歩かねばならなかった。「わさびはいらんかな、安うしとくせな」と、母の教えた言葉をきえいるような

弱い声で呼び歩いた。羞しいやら、こわいやらで五六回も行商は続いたか知ら。少年の日の記憶はながく尾をひき削ついたが、世間への不条理には思いも及ばなかつた。東北の田舎から冷害のため貧しく家の犠牲となつて稼ぎにきている女たちの境涯を子供ころにもわかる気がして足のすくむ思ひであつた。

—一・六・三〇—

### 高山詩抄

—えび坂にて—

こまかい乾いた雪が霏々とななめに  
蛇の目傘をひろげ貌をかくした若い女が  
羽織つたコート裾を気にしながら  
キララに凍みたる道を高い木履を器用に料し

城坂への道を吐く息が白く登ってくる

織い<sup>ほ</sup>掌に傾けた傘で顔や襟元を防いでいるが  
容赦なく吹雪きこむ細かい雪は執拗に襲いかかる  
坂をのぼることが祈りにも似た風情さが愛しく

女との視線が雷<sup>いかづち</sup>のように瞬間<sup>しゅんかん</sup>合つた、と  
思つたのは錯覚<sup>さくごう</sup>でしかなかつた—

坂の両側は巨大な石を積み上げ馬場通りの  
高台へ掘りぬいた城跡への勾配の急な坂道を—  
おらくさんが拉致され代官橋で晒しの辱めをうけたときも  
この坂を捕吏に腕をとられ連れゆかれたのは  
今日のような正月近い雪の降る日であつた—

明治の風趣は遠からず、高山の町はときに  
背景になる舞台によつては百年は逆に廻転し

清方の画いた艶やかな妖しい幻想が  
脳裡に影像して秘めやかな情緒に私を誑かす

雪を積んだ傘だけが雪女郎のように坂を登っていった。

— 六・九・二五 —

少年時代 (二十一)

大正の半ば小学校四年生の夏の一日

鉢山の町のMという駄菓子屋へ

口減らしのため子守りにだされた

小さい女の児が二人いてその守りと

古新聞でつくる菓子袋を貼るのだが

むろん鉄を扱う術も糊刷毛をも碌に使えない子供に

間に合う仕事もできず一日で体よく解雇された

干菓子や甘々棒、飴だまなど一袋もらって家に帰された

小さい胸にも義父へは怨む筋めいば毛頭なく

境遇がしぜんに聞きわけのある子にしていた

が、母の仕打ちには反抗する理不尽がつきまとつた

自分の子たちに万全の備えを果たせなかつた悔いが

自分も八十歳の半ばを迎え母の胸中をおしはかる

十歳くらいの世間知らずの子を口過ぎに出した

血を吐くような母の苦しみが

この頃になりひしひしと伝つてくる

その母も八十歳を迎える大除夜の極月の夜

炉端の太い梢火の消ゆるように往生を遂げられた。

所 懐

— 六・二二・三〇 —

いのちが惜しくないのかと、イエス・キリストさまが言われる

充分生きてきたからこの娑婆に、未練はないのかと、

お釈迦さまが憐れむようにおっしゃる

どちらも本音でどちらも虚言でございませう

腹のその真実、真剣のことを申しましても

あなたがたは虚構のようになましているよ

自分を美化し虚偽の言葉と思われまじよう

もう永く生きてきて欲念は一日々々と遠ざかってゆくことは本当でございませう  
枯れゆく肉体に乾されてゆく情念――

一花咲かせようと思つたこともありましたが

若いうちにやれなかつた無謀なる行動――

失つたものの大きさが今ごろわかつても始まらない

後悔しても過ぎ去つた時間のように還らない――

赤い血潮の流れた時もあった青春の日が私にもなかつたとはいひませぬ

だがいま虚心に心を無にして振り返りますと  
こうした生き方をしてきた人間も

この世に一人くらいあつたとしてもいいのではないかと思ひませんか？

(四・一・一八 清書)

### 射水還り

常世からどれだけ離れた幾億光年のかなた よみの国  
のじめじめした ひとりの誰もが帰つてきてその模様を  
語つてきかせたものがない どんなに知恵を絞つて語  
ろうとし 努力し 想像し 画(え)こうとしても 誰も信じ  
ようとしない具体的な表現はできない。

そこにいつて会えるものなら会いたいひとがたくさん  
いる。こんなに悩み 悲歎にくれて会えるものなら 父  
に 母に 初こいのあの娘や 親しいま異域に眠る友

がらに狂うように会いにゆきたい。

ひとたび若しいちそこに到達しようと思願すれば 会いにゆくのは簡単であろう 一本の綱や 増水した河川へ身を投げる勇氣 または激しい劇薬を内蔵する鳥兜や猛毒のある河豚の卵巣など いのちを縮むる手段はいくらでもあろう 死ぬことは易くて そこから再び現実の此岸に舞いもどり どちらの彼の国の風情を真実こめて語ったものがありますか いないからこそ明日が生きられるのだ。

大正の半ばごろ もはや信じるひとも少なくなつたが 飛騨高山の本町にはたゞ屋を営む平野屋のお神さんが 實際にひとたび死なれて あの黄泉の国からこの世に生き還つてこられたのだ 十歳くらいだった私は何も判らない子供であつたが その時ほど驚愕したふしぎな事件を今でも鮮やかに覚えてゐる 千鳥町の上手に不動院さまがあつて いみず還りのお婆さんの法話というこ

たくさんの町のひとは魅惑され 不動さまは賑つたものであつた。

庄川は鷲ヶ岳に源を発して白川郷を北流し日本海に入る川だが 昔は射水川といつて万葉の家持の歌にも数多く歌われている 奥飛騨の故郷の人たちは遙かに遠い人智の及ぶべくもないよみの国へつづく道で それは一つの救いでもあり 望みを託せる世の果てであつた よみじといみずとの語呂が似ているだけでなく 昔の人びとは単純にその辺りに自分たちの到達する彼岸が 実在していると信じたに違いない。 —三・九・一八一—

### 秋 意

すぎきつた夏の乾<sup>ひ</sup>あがつた

身もこころにも照りつけた熱い日差しが  
からからに体内の水分と庭の草木の水気を吸い上げ  
人びとは情けの慈雨を待ちわびてやまなかつた  
荒廃の砂漠にたつた饑餓にもにいていた――

予期もせず夢寐にも思っていないなかつた客人が訪ない  
拉がれ沈もうとするこころを解きほぐし  
萎えしほむ精神を豊かにしてくれたこと  
幾ばくかのあとに残された残照に托するものを感じた

愁いといい愛情というものは畢竟うす紙の表裏のようなものであるのか  
秋の香を豊饒にふくませた松茸やしめじが贈られてきた  
眷族の者だけが内輪に秘めひっそりと  
水かさを含み山の香を湛えた再び巡り会えると思えない  
神々の恩寵にあずかつていいものであるうか  
ながい夏の乾きに悩んだことなど忘れ

味覚の俘となり豪華な増埒にひととき世俗の幕のかなたで  
王者のおこりに似た感懐に感わされていた。

――二・九・十三改作――

### 木瓜酒

一本ずつしつかりと手で数えてみたわけではない  
畑にもならない瘦せた雑草地の埋め立て地に  
種子を播いたこともないのにくる年ごと  
五、六十本もの秋ざくらが繁り、逝く秋を惜しみつかの間の生を称えている  
深いべに色、清楚なうす桃、気品ある白色が  
競って咲くあいだそこに佇つたとき愉しませてくれた  
花期が過ぎると不惑に容赦なく庭男に刈り取られ  
凋落の残骸を冷えた大地に横たえた――  
その跡地に植えられていることも陰になり忘れられていた  
紅い実を五個ばかり捻らせた木瓜の樹が二々本



その存在を反撥するように紅をひとときわ  
艶めかせ誇らかにたっている

妻が焼酎を購ってくるのと四つくらいに截り

木瓜酒を作るといふ、何に効く薬酒になるのか

——紫蘇酒、またたび、くこ、アロエ、淫羊藿酒

熟した少し濃い果汁がこくのある味を醸し野趣があり

掬すべき飲みものとなつて愛しているんだが——

この頃とみにもの忘れが昂じてきて

痴呆かけた自分に輪をかけるようにボケ酒をたしなむ情景を  
遥かに憐れみ、友よ、乾杯してくれ給え

——三・三・二九 改作——

足いれ

古い戸籍謄本ができた——

昭和のはじめ東京へ確固たる将来の予想もたてず  
郷里を出るとき町役場で「身分証明書」と

「戸籍謄本」とを作らせ大事に

自分を証明する保証人のように行李の底に秘め  
持ち帰って半世紀余りの日月が流れ去つており

その間なんとか見ても気づきもしなかったのだが——  
今はやりの自分史のルーツを探り

貧しい越し方の一くさりを認めておこう、と、想ったのがきっかけになり

薄い雁皮紙の処どころに紙魚の跡が浮き

筆墨の一字ずつ判じて読むと

母の籍が自分の生れた五日後に届け出入籍され  
私が生れてから十五日後に出生となつて届けてある

「一太郎」と名づけ口頭で役場に届けたのが

小学校への入学通知書には「市太郎」となつていて吃驚したそうだ  
明治の終りころ戦勝に酔つた役場の係りも

浮れて重大なミスを犯したのも気づかず

訂正することが不可能で泣き寝いってしまった

母が老いてもときどき怨み言のようになつてしまつた

父と母の長子に対する血液のような温か味をふと感じるとき

「太郎」と命名して何を托そうとした思い入れだけが産みつ放なしで社会に抛りだされた生き態がせめてもの救いである

一国の歴史や小さい一家の虫けらのような家系なんでものどこまで信じてよいか――昔は神岡あたりでははいからな言葉で、今様ならば「試験結婚」なんだが

当時は結婚の一つの形態であった足いれといい子を孕まなかったり、性格が合わず、家風になじめなかったら行李一つもって気軽に遊んで婚家から簡単に実家の敷居を跨ぐのであった。

― 六二・三・三一 ―

### 母が語った言葉

むかしは物価が大うやすかったで、三途の河の渡し賃も穴あきの一文銭が六枚、六文でよかったけどな、今はどのくらいかなあ、この頃はどれほどさ五、六円はいるんじやろもな、父つつあまのゆかしやった大正の中ごろ

世界じゅうに大流行したスペイン風邪で、それは十一月の終りの寒い朝で霜が白うおりておったで。

半搗米の玄ゑんいまんまを茶碗にせめても山盛りに飾り、まんなかまんなかに割箸を二本たて四角い塗り盆に供えて、蠟燭と線香をあげるとまっすぐ線香の煙りが匂って、父つつあまの臥ておいでる屍体の上を這っていったさ、坊さまもなかなか枕経を誦みにきてくれんし、なにしろ狭い町で毎日四つも五つも葬式がつづいて死んでゆかつしやるので、無常場も焼場もなかなか順番がこず、朝浦町のはずれの蟻川の田んぼの中の焼場への列はつづいておぞいて寄つてくれなかつたんでなんと泣いたことかわからなかつたぞ、ただ一つ残っている父つつあまの香典帳をみるとわかるが、淋しいもんじやった。他人へのつきあいもこまめに義理を働いてきたつもりじやったが。おみたちにも四人の小さい子どもをおいて死なれた



ので、ずいぶん苦勞をかけたさ、母子手帳も福祉手帳もなかったんでな、貧乏ものはお上からも見捨てられ政治がわるかったでな。四人の子を抱いたり、負ぶったり、掌をひいたりしてなんと藤橋の上にお経を称えて立とうとしたか知れないぞ。

その春生れた末っ子をかかえておみら四人育ててゆく苦勞がまっくらに肩にのしかかつて、葬式雑用でどのくらいかかるか考えると行きさきまっくらで淋しかったさ。おりも八十ちかくあの世からいつお迎えがござるかわからん年になつたが、お陰でおみたちや曲りなりにもでござなり、ぎょうさんのひ孫たちに慕われて、案じなく逝けることはふんにと嬉しいこっちゃさ。そやけどな三途の川の渡し賃はな、おりのしんがいの小遣い錢で渡れるやろかそれが気にかかつてな。—三・二二・二〇—

### 生命と言葉と

ぎりぎりのこの日のくることが  
自分の發意ではなかったが

誕生の日の瞬間から行進が始つており  
約束されていたはずであつた  
徐々にじわじわと生きている者の上に

平等にのしかかっていたことは汗顔に知らず  
時に人を怨み世を嫉んだこともあつた  
王侯でも極く貧に喘ぐ庶民の生活にも  
これだけは平均に彼は訪ずれてくる

ここに來ては手遅れで後悔はもうおそい  
賢明で前後の策もなく慌てても  
のっぴきならぬ終いの日に

言い残した数かずの言葉は還つてこない  
若い日でなければ告げ得られなかつた言葉は失せてしまった。

### 愛情記

鈍行の汽車は各駅を素直に停まり  
再び鈍い汽笛を銜して喘ぐように発車する

海水浴にゆきたい、海をみたいとせがまれ  
重い腰をあげた若い父は、でも幸せらしく  
二人の年子の子供にひかされて  
遠く新潟にちかい日本海の石田浜まで来た

初めて見る海の潤さにあきれ

塩からい海の水にふしぎがり

織い未成熟な胸盤を思いつきり

碧くひろがった潮騒にまかせていた

めつたに汽車に乗る機会に恵まれず  
いつの日か成人し人の子の親となり  
この日の短かい父と一緒に遊んだ行旅を

ふと想起する日はありやなしや  
汽車の窓に倚り貌をだし嬉々と戯れる  
飛び込んでくる蜩の涼しい音が  
こどもたちの潮を含んだ髪を撫でてゆく。

—昭和一九年夏ころ—

虚しい

ながい人の生きる一日のある時間  
—今日は何をしよう—と

どうして一日を送ろうか  
もてあます時間があつてよかつた  
うかつにも大切なことを逃がしてしまつた  
このころそんな風懐がよぎつてならない

旅に費いやした距離はどれだけ

読書に耽った時間はどれだけ  
履歴書に書く来歴は空白だらけ  
人生はさらさらで砂礫の味気なき――

働きすぎてきた馬車馬だった  
頭脳に貯えることを怠った報いが  
教養のかけらの蓄えたものが微塵もない  
ひきたすものが何もなく残るものは空しい孤独。

―八・八・二〇―

ある箴言

汝よ

迫るべからず  
追うべからず  
誘うべからず

お前よ (意訳)

逃げる人に追っていけない  
悪意もつ人を追つて羞かし  
忌避されてる人から逃げよ

汝よ

負けるも可々なり  
孤独また愛すべし  
自己に克つまた可

お前よ

負けて唯々諾々と従う  
孤りの独居また愉し  
自分に勝つのは敗け

汝よ

人生は妙々奇天烈  
人生は不可解なり  
右衽々逆また娛し

お前よ

人生だから妙味術あり  
世事万端不可解で良し  
誓言の詞章逆も可なり。

(一〇・六・三五)

あとがき

和 仁 市 太 郎

この詩集は平成六年六月から同じく八年五月まで約二年に亘って飛騨新聞（旬間発行）に「小詩片語」という題号で発表したもので、せいぜい十二行くらいまでの作品という制約があつて、主幹の桐山さんが貴重な紙幅を提供してくれたからだと思う。前社主の藤森一雄（美水）以来の悪縁？の賜であらう。

本年正月、富山にいる次男の郁郎が来遊。去年の夏、勤め先を定年で退職しその後閑職にいたが、暇があるようになった。帰宅すると、早々、お父さん ワープロでよかつたら詩集を作製してあげる、と、言ってきた。第六詩集「私の植物誌」を出版して約二十四、五年、感ずることもあつて、自分に資力もないのが第一の理由だが、遺稿集なども出版は絶対しないと自分に誓ってきた。（それに、多治見の詩人で、かつて一度もお会いしたことのない、全く未知の、久野 治さんが、私の全詩集の作品をピックアップされて、評論集「山脈詠派の詩人 和仁市太郎の詩業」という秘大なA5判360頁余りの評論集を1000部も喜喜寿を祝つて寄贈された。「すみなむ」の初期の作品も少なからず採用されている。）次男が親孝行のため作成するのなら好きなように、やつたらいいと非情なことを言つて出版を全部任せたのがこの詩集である。過去に幾冊かの自費出版した粗末な詩集の出版の喜びとまた違った意味の感激を感じておる。本詩集の編集も連絡が巧みにゆかず、その後計画が変更され、竟のようになったが慣れない仕事の製版、印刷を引受け奉仕してくれた次男夫妻ならびに表紙絵を賜つた同郷出身の沖野 清先生、発刊所の飛騨新聞社・桐山千明氏に永年に亘る新聞への執筆など貴重な紙面を提供して、理解・援助に対し感謝しここに礼申し上げる。

平成十一年 六月二十五日

（89歳誕生の日）

## あとがき (二)

本詩集の出版までのいきさつは「あとがき」に記しました。製版印刷してくれた次男が富山市にいたので、何かと連絡がスムーズにゆかず二度ほど校正もし、なかの題などある程度指示しました。印刷用紙（表紙もふくめて）校正、製本も次男に委かせて気になっているようにいいましたが、去る十一日詩集を持参来宅しました。帰宅後よく検討してみると、校正の間違い、表紙の背クロスの貼り方、化粧截ちもしない等々……。印刷紙もB紙五十五kgでは裏うつります。せめて七十kgにして欲しかった。

家族の者は発行を中止したらとまでいうのですが、せっかく好意にしてくれた厚情を思いますと、進退きわまつた感じ です。

そんなわけで進呈できる代物でないのですが、苦しい胸中を吐露しここに敢えてお笑いぐさに家庭内の恥を書いて第二の「あとがき」といたします。

平成十一年六月

日

各 位

和 仁 市 太 郎



昭和十一年六月 日

日

谷山先生に宛てた手紙の一部分をここに掲げます。

先生は、詩壇の発展のため、力をつくすので、詩壇の中を和氣に満ちた草葉の詩壇にしたいと、その家内内陣は、まことに感心です。

家内は、谷山先生に、中山の詩壇に、ついでに、詩壇の発展のため、力をつくすので、詩壇の中を和氣に満ちた草葉の詩壇にしたいと、その家内内陣は、まことに感心です。

谷山先生は、詩壇の発展のため、力をつくすので、詩壇の中を和氣に満ちた草葉の詩壇にしたいと、その家内内陣は、まことに感心です。

谷山先生は、詩壇の発展のため、力をつくすので、詩壇の中を和氣に満ちた草葉の詩壇にしたいと、その家内内陣は、まことに感心です。

谷山先生は、詩壇の発展のため、力をつくすので、詩壇の中を和氣に満ちた草葉の詩壇にしたいと、その家内内陣は、まことに感心です。

谷山先生は、詩壇の発展のため、力をつくすので、詩壇の中を和氣に満ちた草葉の詩壇にしたいと、その家内内陣は、まことに感心です。

あしなわ

著者小歴

明治四三年六月（1910年）岐阜県吉城郡船津町（現・神岡町）に生まれる。

昭和二年三月二六日 船津小学校の併設の補修夜学校を卒業する。あと学歴なし。

昭和五年八月一〇日 詩集「生を視つむる」自家版発行する。

昭和八年八月一〇日 詩集「暮れ行く草原の想念」美踏社工房刊

昭和一四年二月一五日 詩集「石の独語」山脈詩派社刊

昭和三三年四月二〇日 詩集「禁猟区にて」詩宴社、山脈詩派社両社共同出版

昭和四四年一月三日 詩集「薄暮記」山脈詩派社刊

昭和五四年六月二五日 詩集「私の植物誌」すみなわ詩社発行

・「創作」「隨筆」「短歌」などの作品は省略した。

・昭和五年三月、岐阜県教育委員会より「あなたは詩の創作を通じて文化の普及振興に貢献されたところ大である。」と「芸術文化奨励賞」を授与され、その他、高山市長賞、高山市文化協会賞、大阪毎日新聞社、丁氏賞など同じ理由で顕彰を受ける。大正一四年頃より詩誌を編集発行し、七〇余年に及び、昭和五二年一月詩誌「すみなわ」が創刊されるや参加し、平成二〇年一月、八五号をもって老齢のため同人を辞した、時に八九歳であった。

秋

和仁市太郎

詩集 流域 平成十一年六月二十五日発行 (非売品)

T506-00008

著者

高山市 森下町 一の三五

和仁市 太郎

電話 0577-32-3569

T930-0859

編集  
印刷

高山市 牛島本町 二の五の十一

和仁市 郁郎

電話 0764-31-2050

T506-00008

高山市 初田町 三の二二〇

飛驒新聞社

発行所  
発行人

桐山 千明

電話 0577-32-4193

